リリドラクロスオーバー～優しき少年の恋物語～

空蝉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリドラクロスオーバー～優しき少年の恋物語～

【Ｎコード】
Ｎ３２８７Ｗ

【作者名】
空蝉

【あらすじ】
ある日、ある優しき少年は親友や想い人の目の前で子供を庇い死んだ……
が、何故か死んだ筈なのに転生してしかも生まれた場所と生まれ時に何故か持っていた碧色の玉みたいな物を持って前世の生まれ故郷ではなく海鳴市という街だった
リリカルなのはとドラえもんのクロスオーバー話です！！

不定期更新になるかも知れませんが末長くよろしくお願いします。

※只今、無印編を執筆中です！！

初めに（前書き）

作品説明

初めに

この話は、魔法少女リリカルなのはとドラえもんのクロスオーバーです！！

主人公はのび太となのはです！！

のび太は、原作のドラえもんの世界で死んでしまった設定になっています。

のび太が、死んでいるのが嫌だの人は戻るを押して下さい！！

のび太は、この話で準チート設定でなのは達と同い年設定です！！

作者は、リリカルなのはをあんまり知らないですが頑張って完結出来るよう頑張ります。

後、クレヨンしんちゃん魔忍の英雄伝と同じく不定期更新になるかも知れませんが何とぞよろしくお願いします。

第零章：プロローグ（前書き）

更新しました。

第零章：プロローグ

どうして、こんな事になったのかな……

そう、心の中で呟いたのは丸い眼鏡を掛けて蒼色の服と短いズボン着た少年で小学5年生で数々の冒険を友人達として来た主人公野比のび太は今命の灯火が消えようとしていた。

何故、のび太が死にそうになっているのかは何時ものようにジャイアンとスネ夫と静香ちゃんと一緒に学校から帰っている時に幼い子供が横断歩道を渡ろうとしている時に信号が赤信号なのにそれを無視して車が猛スピードで向かって来ている事に幼い子供は気付かずそれに気付いたのび太が走って子供を庇い車に引かれてしまった。

「「「のび太／さん！？」」」

ジャイアンとスネ夫と静香ちゃんは、急いでのび太の方に向かった。

「グフッ、……ジャイアン…ハァッ…あの子は……無事？」

のび太は、血を流しながらもジャイアンに自分が助けた子供の安否を気にした

「あぁ、大丈夫だ怪我はかすり傷ぐらいだ。それよりもお前の方が危ないだろ今、スネ夫が救急車を呼んだからあんまり喋るな！！」

ジャイアンは、そうのび太に言った。

「ふぅっ……ハァッ…、僕は……もう駄目だよ。」

のび太が、そう弱気な事を言うと

「何、言ってんだよのび太お前らしくないぞ！！」

「そうよ、のび太さん！？」

そう、のび太にスネ夫と静香ちゃんは少し怒鳴るように言うが……

「……皆だって、分かってるでしょう……僕が助からないこと？」

そう、のび太は子供を車から庇った時に体と頭を強く打って頭から血が大量に流れて来ている事に気が付いていた。

「そんな事を、言うじゃねよ！！お前は絶対に助かるんだよ。」

「……ふぅっ……、そうだと……良いな～」

だが、時間は無情にも過ぎて行きのび太は意識が朦朧として来ている事に気が付いた。

「（……はっはぁ、やっぱり駄目みたいだな～でも子供が助かって良かったかも！！）」

のび太が、そんな事を思っていると……

「のび太君！！」

「……ドラえもん。」

親友で、お兄ちゃんみたいに頼りにしているドラえもんが来た。

「のび太君、今お医者さん鞄で治すからね！！」

ドラえもんが、のび太にそう言うが……

「……もう無理だよ……先から意識が朦朧として来ているんだよ……」

「諦めちゃ駄目だよ！？…君の人生はまだまだ何だよ！」

だが……

「……もう良いんだ」

「何が良いんだよ！！」

「…僕ね、ジャイアン・スネ夫・静香ちゃん・ドラえもん君達に…

…会えた事が一番の思い出だよ…」

のび太は、そう皆に言った時

「……ゴホッゴホッ…」

「「「「「のび太、さん／君」」」」

「……皆、今までゴホッ……あ…り……が…とう…」

「「「「「のび太君／さん！？」」」」

のび太は、皆に看取られ亡くなった。

と、思っていた

オギャオギャ

「男のお子さんですよ！！」

「オギャオギャ（あれ、僕は確か皆に看取られて死んだ筈）」

のび太が、そんな事を思っていると

「私の可愛い子、お母さんですよ～」

と、綺麗な女の人がのび太に微笑んだ。

「オギャ（どうしょう僕、赤ちゃんに転生したみたいだ～）」

こうして、のび太は赤ちゃんに転生し新しい人生を送る事になった。

まさか、これから白い魔王と呼ばれる少女と出会うとはこの時のび太は知る由もなかった。

次回に続く

第零章：プロローグ（後書き）

次回は、なのはとの会合です

第一章：原作開始前（前書き）

なのはさんとの会合です。（士郎さんと桃子さんも出てます。）

第一章：原作開始前

のび太が、ここ海鳴市に転生して5年が経った

やぁ、僕の名前は森川のび太です。

え、名字は野比じゃないのかって？それは転生した今の両親で父森川廉と母森川祐子との間に転生して生まれたから前世の名字じゃないだよ

まぁ、前世の時の両親や親友達を忘れる訳では無いけど僕はここで頑張って生きていく事を誓った。

で、今僕はお父さんとお母さんの友達である高町士郎さんと言う人が大怪我して病院に入院しているからお見舞いしに一緒に行く事になった……

病院に付いた僕達は士郎さんの病室に向かった。

コンコン

「……どうぞ！！」

と、病室の中から男の人の声が聞こえて僕達は病室に入った。

「よぉ、士郎お前が大怪我何てするなんてよ？」

「いや、僕だって人間だからね怪我をするよ……」

「まぁ、士郎君はある意味悪運が強かったからね！！それより桃子は今日来るの？」

と、お母さんが士郎さんに聞いた。

「あぁ、桃子はなのはを連れて来るって前言ってたよ……それよりその子はのび太君かい？」

士郎さんが、お父さんとお母さんに僕の事を尋ねた

「そうだよ、お前と子のなのはちゃんと同い年だよ…ほらのび太士郎に挨拶。」

と、お父さんが僕に士郎さんに挨拶をするよう言ってきたので僕は士郎さんに挨拶をする事にした

「はじめまして、士郎さん。僕の名前は森川のび太です！！」

「うん、よろしくのび太君。」

そんなこんなで、のび太達は士郎と喋っていると……

コンコン

「どうぞ！！」

「お父さん、お見舞いに来たよ。」

「士郎さん、お見舞いに来ましたよ」

「桃子さん・なのは、ありがとう。」

士郎さんは、奥さんの桃子さんとなのはちゃんにお礼を言った。

「「桃子、久しぶり／だね」」

「廉君・祐子ちゃん来てたんだ。」

「うん、息子と一緒にね。」

「じゃあ、この子が……」

桃子さんは、僕を見て挨拶して来た。

「はじめまして、のび太君高町桃子と言います！！で、こちが娘の

高町なのはよ。」

「はじめまして、桃子さん・なのはちゃん僕の名前は森川のび太です。」

「のび太君ね、ワタシは高町なのはなのよろしくね！！」

「うん、よろしくなのはちゃん。」

なのはｓｉｄｅ

今日、お母さんと一緒にお父さんが入院している病院に行ったら病室に知らない格好男の人と綺麗な女の人ととっても優しそうな男の子が居た。

格好男の人は森川廉さんで綺麗な女の人は森川祐子さんで優しそうな男の子は森川のび太君と言うそうです。廉さん達はお父さんとお母さん達と友達でお父さんが怪我で入院したからお見舞いで来たそうです。

そんな中で、のび太君が私と同い年て聞いてのび太君に普段どんな事しているのと聞いたら綾取りと本を読んだり友達と外で遊んだりしているそうです。私はのび太君に綾取りで色々な物を教えてもらいました。

「はい、これが東京タワーだよ～」

「うわぁ、凄いね！！」

「何言ってるの、なのはちゃんだて僕が教えた物すぐに出来るようになったんだからそれが凄いと僕はそう思うよ。」

のび太君は、なのはに優しく微笑んでそう言った。

「（うぅ、何だろのび太君の事考えていると心臓がバクバクするよ～）」

なのはは、無自覚にのび太に好意を持った。

なのはｓｉｄｅ終了

それから、夕方になりそろそろ帰る事になった為のび太達は士郎達にそろそろ帰る事を言いのび太はなのはにまた遊ぶ約束をして両親と一緒に病院を後にした。

次回に続く

第一章：原作開始前（後書き）

次回は、いよいよ原作開始です！！

第二章：無印編１（前書き）

次回は、戦闘を書きます。

後書きにアンケートを書いています。

第二章：無印編１

ある、夢を見た。２１個の宝石が地球に降り注ぎ男の子がその２１個の宝石を探す夢を……そして何故か、僕となのはちゃんともう一人の金髪の少女と空に浮かんで２１個の宝石の所有を掛けて戦うている夢を……

「……夢か。」

僕は、目を覚ました。この時まさか夢が現実になるとは思いもしなかった！！

「おはよう、お父さん・お母さん！！」

「おはよう、のび太！！」

「あら、おはようのび太朝ご飯出来ているから早く食べなさい。」

「うん、分かった。」

僕は、朝ご飯を食べて自分の部屋に行き碧色の珠のネックレスを首にかけて鞄を持って家を出て学校のバスが来るバス停に向かった。

バス停に、着くとなのはちゃんと月村すずかとアリサ・バニングスが先に来て居た

「おはよう、なのはちゃん・すずか・アリサ。」

「あ、のび太君おはようなの！！」

「おはよう、のび太さん。」

「おはよう、のび太。」

なのはちゃん達に、挨拶をするとなのはちゃん達も僕に返事を返した。

それから、5分後バス停にバスが到着し僕となのはちゃん達はバスの中に入って後ろの席に座った。それから、バスは学校に着き僕となのはちゃん達は教室に向かった

僕となのはちゃん達は、屋上でお昼ご飯を食べる事にした。

「そう言えば、私今日変な夢観たの。」

「「「変な夢？」」」

「何か、男の子が変な怪物と戦っている夢なの。」

それを、聞いた僕は……

「なのはちゃんも？」

「私も？って、のび太君も観たの夢！！」

「うん、僕の場合はなのはちゃんと僕とある男の子と金髪の女の子が２１個の宝石？の所有を掛けて戦っている夢何だけどね。」

「何か、ファンタジーな夢ねあんた達が観た夢？」

「そうだね。」

そんなこんなで、お昼休みも終わり僕達は教室に戻った。放課後、学校も終わり僕達は塾に向かっていた時……

『助けて！！』

「「！！」」

なのはとのび太の頭の中に声が響いてきた。

『……誰か……助けて』

僕となのはちゃんは、また声が聞こえて来てその声の主が居るであろ森に入った

数秒ぐらい走ると少し開けた場所に到着した。
周りは木々に囲まれ、中心に夕暮れの光が差し込んでいるような場所だ。その中心にクリーム色の毛並みをしたフェレットが横たわって居るのを発見した。

「ハァハァ、なのはちゃん・のび太君！！」

「ハァハァハァ、なによいきなり走りだして・・・・フェレット？
しかも、怪我してるじゃない！！確か、この近くに動物病院があるからそこに連れて行きましょう！！」

アリサの提案を聞いて、僕達は動物病院に向かった。

「「「「失礼します！！」」」」

僕達は、怪我をしたフェレットを獣医さんに任せて塾に向かった。

塾が終わり、家に帰って来た僕は自分の部屋に行き服を着替えて下に降りて夕ご飯を両親と食べた。

夕ご飯を食べ終わって今日塾に行く時になのはちゃん達と怪我をしたフェレットを見つけて動物病院に連れていた事を話したらお母さんは

「無事で、良かったわね」

と言いお父さんは

「フェレットか、もし飼い主が見つからなかったら家で飼うか～」

お父さんの言葉にお母さんも

「そうね、そうだったら家で飼いましょう。」

と、ほのぼのとした会話をした

その後、僕は部屋に戻り明日の準備をしていると……

『助けて、お願い僕の声が聞こえる人！！僕に力を貸して下さい。危険が・・・・・・・・』

塾に行く時に聞こえた声が聞こえて僕は碧色のネックレスを首に掛けてお父さんとお母さんに内緒に家を出て声の主の方に向かった！！

次回に続く！！

第二章：無印編１（後書き）

アンケートは、のび太のデバイス名を皆様から募集します！！

期日は、９月９日金曜日までです。

ちなみに、のび太のデバイスはインテリジェントデバイスでＴＯＡのリグレットが使っていた双銃型です！！

第三章：無印編２（前書き）

今回は、長いかも？

第三章：無印編2

のび太ｓｉｄｅ

家から、出た僕はとにかく声の主の安否が多分危ういと思いとにかく早く走っていた。

「ハァハァ（一体どこに居るんだよ！！）

のび太が、走りながらそう思っていた時……

のび太の耳に爆音が聞こえた。
しかも、かなり近くのようだ

のび太は、爆音があった場所に急いで向かった

「（よし、次に右に曲がれば爆音があった場所だ！！）」

のび太は、そう思い右に曲がるとそこは放課後に怪我をしたフェレットを預けた動物病院のすぐ近くで何故か幼なじみの高町なのはと彼女の肩に乗ったあの怪我をしたフェレットもそこに居た。

のび太ｓｉｄｅ終了

なのはｓｉｄｅ

動物病院を後にした、私とのび太君とすずかちゃんとアリサちゃんは急いで塾に向かった。

何とか遅刻せずに着いた私達は塾の教室に入って講師の先生が来るまで待っていた

４時間後塾が終わった、今日はこの前したテストを返された私は今回８５点だった。前よりは上がったがアリサちゃんとすずかちゃんも前回より上がっていたみたいだけどのび太君には負けたみたいだった！！

のび太君は、学校のテストでも１００点を取るぐらい頭が良いからたまに私が知らない事を教えて貰う事もある。

家に着いた私は、お母さんに返された塾のテストを見せたこの前より上がった点数だったから嬉しそうだった。部屋に戻って着替えて学校で借りた本を読んでいた時お母さんが夕飯出来たから下に降りて来なさいと言われ私は読んでいた本に栞を挟んで下に降りた。

私は、晩御飯を食べた後塾に行く時にのび太君とすずかちゃんとアリサちゃんと怪我をしたフェレットを見つけた事を話して家で飼って良いと家族に相談したら皆ＯＫしてくれた。

寝る前にアリサちゃんとすずかちゃんとのび太君にＯＫが出たことをメールした私は寝ようとしていた。

その時

キイィィィン

［聞こえますか？僕の声が…聞こえますか？！］

「夕べの夢と昼間の声と同じ声？」

私は、そう呟いた

［聞いてください…僕の声が聞こえるあなた…僕に少しだけ力を貸してください。］

「（あの子が喋っているの？）」

［お願い！僕のところへ！！時間が…危険がもうっ！］

私は声が聞こえなくなると急いで家から出て動物病院へ向かった。

私が動物病院へと着くと病院内からフェレットが逃げて出てきた。
「助けに来てくれたの？」
「しゃべった？！」
フェレットの後から何かが出てきてた。
私はフェレットをつれて逃げ出した。
逃げている途中私はフェレットからどういう状況であるかを確認すると
協力を求められた、簡単に説明するとこうなる。
彼は探し物をしに別の世界から来たという。
自分だけの力だけでは集められない可能性があるから資質のある私に協力してほしい。
ということになる。
話している間に謎の生物が降ってきた。
「どうすればいいの。」
「これを」
フェレットは首に下げていた赤い宝石を私に渡した。

「それを手に目を閉じて心を澄まして。僕の言う通りに繰り返して。いい？いくよ？」

私は宝石を持ち目を閉じ念じる。

「我使命を受けし者也」

「われ使命を受けし者なり」

「契約の下その力を解き放て」

「えと、契約のもとその力を解き放て」

宝石が脈動する。

「風は空に星は天に」

「風は空に星は天に」

さらに力強く宝石が脈動する。

「そして不屈の心は！」

「そして不屈の心は！」

「「この胸に！この手に魔法を！レイジングハート！セットアップ！」」

「Ｓｔａｎｄ　Ｂｙ　Ｒｅａｄｙ　Ｓｅｔ　ＵＰ」

宝石…レイジングハートは光輝く

「…成功だ。」

なのはは杖を手に持ち、私立聖祥大附属小学校の制服を改造したような服装に変身した。

なのはが自分の格好に動揺し、フェレットが感動していてもなぞの生物は襲ってくる。

高く跳びなのはめがけて急降下してくる。

「きゃぁ！」

私は動けず身を固めるが

「Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ」

レイジングハートが防御壁を張りなぞの生物を跳ね返す。

「ありがとう、レイジングハート！」

私が、レイジングハートにお礼を言っている時にいつの間にか謎の生物の攻撃が背後に迫っている事に気が付かなかった。

「後ろ！！」

私は、フェレットの言葉で後ろを振り向くとすぐ側まで謎の生物の攻撃が迫っていてレイジングハートの障壁魔法も間に合わないほど近くまで来ていた……

「（あぁ、私死ぬのかな？）」

私が、もう駄目だと思い目を瞑った時

「レイジレーザー！！」

私は、聞いた事のある声で後方から来た援護射撃？によって謎の生物の攻撃を喰らわず済んだ。私は後ろに振り向くとそこには……

「なのはちゃん、大丈夫！！」

幼なじみで、片思いの相手で私より動きやすいＢＪ（バリア・ジャケット）を着て両手に双銃を持った森川のび太君がそこに居た。

なのはｓｉｄｅ終了

のび太ｓｉｄｅ

僕は、動物病院の近くに到着した僕はまさか幼なじみのなのはちゃんも来て居るとは思ってもみなかった。

僕は、何とかなのはちゃんの所に向かおうとした時に

「我使命を受けし者也」

「われ使命を受けし者なり」

なのはちゃんが、フェレットの後に言葉を言っている事に気が付いた

「契約の下その力を解き放て」

「えと、契約のもとその力を解き放て」

「風は空に星は天に」
「風は空に星は天に」
「そして不屈の心は！」
「そして不屈の心は！」

「「この胸に！この手に魔法を！レイジングハート！セットアップ！」」
と、なのはちゃんとフェレットがそう言うとなのはちゃんは光に包まれた。

「何が起きたんだ！」
僕は、光の眩しさに顔を手で遮りながらそう呟いた。
光が、消えると僕はなのはちゃんの方を見ると僕達が通う私立聖祥大附属小学校の制服を改造したような服装に変身していて手には長い杖みたいな物を持っていた。
それを、見た僕は……
「どうして、なのはちゃんが……」

僕は、前の世界の事をふっと思い浮かべた。

あの時の僕は、頼りなく弱虫でいつもジャイアンとスネ夫に馬鹿にされてドラえもんに秘密道具を出してとせがんでいた……けど今は違う頼れるドラえもん達は居ないけど僕は

「なのはちゃんを、助けたいんだ！」

その僕の、思いが通じたのか碧色の珠のネックレスが光った。

【あなたは、何故力を求めるのですか？】

碧色の珠は、光ながら僕にそう言って来て僕は

「大切な幼なじみの女の子を助けたいから！」

僕は、そう碧色の珠にそう言った。

【分かりました、あなたにいいえマスターに力を与えましょう。私の後の言葉を言って下さい】

「分かった。」

【我、運命の優しさの者なり】

「我、運命の優しさの者なり」

【神速の如く、断罪を行う】

「神速の如く、断罪を行う」

【光と闇は混沌の如く、同一】

「光と闇は混沌の如く、同一」

【そして、５つの優しさを】

「そして、５つの優しさを」

【「この胸に！この手に魔法を！テネフィフス・ドラゼット！セットアップ！」】

「Ｓｔａｎｄ　Ｂｙ　Ｒｅａｄｙ　Ｓｅｔ　ＵＰ」

僕は、なのはちゃんみたいに光に包まれた。

【あなたが、使いやすい武器と自分に最適な防具みたいな服を思い浮かべて下さい！】

僕は、テネフィの言葉を聞いた僕はまず自分の武器と自分に最適な防具みたいな服を思い浮かべた。

「（僕には、あれしかない！）」

まず、武器は得意の射撃を補う為双銃にして最適な防具みたいな服は動きやすい服をイメージした。

光が消え、そこには黒に緑色の線があしらわれた長いズボンに袖の所から赤色の線があしらわれた黒の服を着たのび太が現れた。

「これが、僕の武器と動きやすい服」

【そうです、マスター武器は双銃型のデバイスで動きやすい服はＢＪ（バリア・ジャケット）と言います。】

「デバイスに、ＢＪ（バリア・ジャケット）」

僕が、自分のデバイスとＢＪ（バリア・ジャケット）を見ていた時

「後ろ！！」

僕は、フェレットの言葉を聞いてなのはちゃんの方を振り向くとすぐ側まで謎の生物の攻撃が迫っていた。

「（やばい、なのはちゃんが危ない！）そんな事させるかレイジレーザー！！」

僕は、テネフィをなのはちゃんに攻撃しょうとした謎の生物に向かって射撃し何とかなのはちゃんに当たらず済んだ。

「大丈夫、なのはちゃん！」

僕は、そう言いながらなのはちゃんの方に向かった。

のび太ｓｉｄｅ終了

三人称ｓｉｄｅ

僕が、なのはちゃんの方に着くとなのはちゃんが僕に喋りかけて来た。

「どうして、のび太君が此処に居るの！！」

「何でって、そこのフェレット君が呼んだからだよ。」

「のび太君も、この子の声が聞こえたの！」

「うんまぁ、そんなとこだよ。」

そんなほのぼのとしたお喋りをしていると……

「何を、悠長に喋ってるの！」

僕となのはちゃんはフェレット君に怒られた

「とにかく、僕は援護射撃をするからなのはちゃんアイツを倒そう！」

「うん、分かったの！！」

僕は、謎の生物に向かって射撃をしていた。

「リリカル・マジカル」

「封印すべきは忌わしき器、ジュエルシード！」

「ジュエルシード封印！」

「Ｓｅａｌｉｎｇ Ｍｏｄｅ Ｓｅｔ ＵＰ」

レイジングハートから幾つもの桃色のリボンがのび、なぞの生物を縛る

「Ｓｔａｎｄ　Ｂｙ　Ｒｅａｄｙ」

「リリカル・マジカル　ジュエルシードシリアルＸＸＩ　封印！」

「ｓｅａｌｉｎｇ」

桃色のリボンがさらに伸び今度はなぞの生物を貫く

なぞの生物が消滅すると後から青い宝石が出てきた。

「これがジュエルシードです、レイジングハートで触れて。」

なのはがレイジングハートをジュエルシードに向けるとジュエルシードは浮き上がりレイジングハートに取り込まれた。

なのはの変身が解け普段着に戻る。

「あれ？終わったの？」

「はい、あなた達のお蔭でありがとう…」

なのはちゃんと僕はフェレットを心配ししゃがむが、遠くからパトカーのサイレンの音が聞こえてきた。

「「ご、ごめんなさ〜〜い！！」」

なのはちゃんと僕は謝りながらフェレットを抱え逃げ公園でお互いに自己紹介してから家に帰った。
僕は、なのはちゃんを家まで送り家に帰るとお父さんとお母さんに物凄く怒られた。

次回に続く！！

第三章：無印編２（後書き）

デバイスの名前を、応募してくれた拓也＝どえんジョーカーさん・シンゴさん・白いサンタクロースさん・クロンさんありがとうございます！！

皆さんから送られたデバイス名がとっても良い名前だったために私空蝉は悩んで送られた名前をどうするかと思い皆さんから送られた名前を勝手ながらもじりとってデバイス名を付けさせて貰いました。

誠に申し訳ありません。

デバイス名は、テネフィフス・ドラゼットです。

主人公設定とデバイス設定（前書き）

少し、修正しました。

主人公設定とデバイス設定

名前　森川のび太

ＣＶ：大谷育江

身長　１３８ｃｍ

体重　３４ｋｇ

容姿

サラサラした感じの黒髪を肩に掛かるぐらいでキリッとした感じの黒目に銀縁眼鏡を掛けている。

性格

優しい・友達想い・鈍感・冷静沈着・たまに腹黒い

ｆａｔｅ風ステータス

筋力：Ｃ（Ｂ＋）体力：Ｃ＋（Ｂ＋）魔力：ＡＡ＋（Ｓ＋）身体能力：Ｂ＋（Ａ＋）空戦：Ａ－（ＡＡＡ）射撃能力：ＳＳＳ（ＥＸ）知力：Ａ＋幸運：Ａ

（）は、魔力解除状態のステータス

ＢＪＴＯＡ（バリア・ジャケット）の六神将のシンクが最終決戦で着ていた服の色違いと首にスカーフを付けている！！

魔力変換資質

疾風

設定

ある日、友達のジャイアンとスネ夫としずかちゃんと一緒に学校帰りに子供が車に引かれそうになり変わりに庇って死んだら別の世界に転生した。

デバイス名：テネフィフス・ドラゼット

通称：テネフィ

ＣＶ：竹内順子

インテリジェント・デバイス

性別：女

マスター：のび太

性格

優しい・腹黒い・マスター命

設定

のび太のデバイスで、双銃型のインテリジェントデバイスでありのび太が思い浮かべれば色々な銃型に変化する事ができる。

第四章：無印編３（前書き）

ＰＶアクセスが、いつの間にか１万越えとお気に入り登録数が２０になっていた。

こんな、駄文ですがこれからも頑張ります！！

第四章：無印編3

昨日夜無断で外に出てお父さんとお母さんに怒られた、翌朝僕は何となく早起きしてしまった。

「まだ、朝の5時半か。（昨日は、大変な1日だったな～）」

そりゃあ、前世の世界でも色々な事が合ったからそこまで驚く事はなかったけど……

「まさか、また魔法が使えるとはねぇ。」

ぼくは、そう独り言を呟いた。あの時の魔法はドラえもんの道具のもしもボックスで魔法が使える世界になれと思い使ったら魔法が使える世界になった。そして今の魔法はデバイスを使う事で魔法が使える用になる事が出来る！！僕は、ベッドから起き上がって自分の机の上にあるテネフィに挨拶した。

「おはよう、テネフィ！！」

【おはようございます、マスター♪】

「昨日は、あんな事が合ったから話を聞けなかったけど今はまだ学校に登校するまで時間があるから聞くけど昨日も最初に言ったけど僕はなのはちゃんを助けたいんだ！！君は昨日の双銃モード以外になるには僕が双銃モード以外を想像すればそれになるんだよね？」

【はい、そうです！！マスターが知る銃系なら一部を除いてなら大丈夫です。】

テネフィの、その言葉を聞いた僕は……

「（なら、あれも僕が想像すれば……）そうか、分かったよありがとうテネフィ！！」

【いいえ、お役にたてて良かったです。】

僕は、テネフィにそう言うとテネフィを待機モードのネックレスになってもらいいつものように首に掛けて学校の制服に着替えて自分の部屋から出てリビングに向かった。

朝ご飯を食べて、僕は鞄を持っていつものようにバス停に向うとアリサちゃんとすずかちゃんとなのはちゃん達がもうバス停に来ていた。

「おはよう、三人共！！」

「「「おはよう、のび太／君」」」

僕は、三人に挨拶すると三人も僕に挨拶を帰した。バスが着て僕と三人はバスに乗った！！

「そう言えば、聞いた？」

「何を」

「あの、フェレットを預けた動物病院何か事故で壊されたみたい何だよね～」

「「（（ギクッ！？））」」

「そうなんだ、あのフェレット大丈夫かなぁ？」

アリサちゃんが、あの動物病院の事を話した時僕となのはちゃんはドキッとしてすずかちゃんはフェレット（ユーノ）を心配していた……

「あのね、その事何だけどあのフェレットなら、私とのび太君が保護したよ。昨日のび太君とのび太のお父さんとお母さんが家に来ていてジュースとお菓子無くなったから二人で買いに行く途中動物病院の近くを通ったからあのフェレットが外に出ていて私とのび太君を見つけて向かってきたところを保護したから、安心していいよ。すずかちゃん！！」

「そうなんだ♪」

そんなこんなで話しをしている間に４人を乗せた通学バスは私立聖祥大学付属小学校に到着した。

授業中、ジュエルシードの事を、なのはちゃんと僕はユーノの説明を聞いていた。

『……ってわけなんだ。』
ユーノの念話で2人に事の事情を話した。
ユーノ曰く、ジュエルシードはユーノが偶然発見。危険度が高いために本局に護送される事になった。
しかし、ジュエルシードを護送していた艦が何者かの『次元跳躍魔法』を受けて、壊滅してその際、ジュエルシードが『地球』に散らばった。

『『でも、それならユーノ／君のせいじゃないよ／ね？』』
なのはちゃんと僕の意見は最もである。
ユーノはジュエルシードが飛び散ったのは自分のせいだから、自分で回収するという意見である。
しかし、ジュエルシードが飛び散ったのは護送艦を攻撃して何者かが原因である。つまり、ユーノに責任はないのだ。
しかし、ユーノは……
『あれを発掘したのは僕だから……』
そう言うユーノの意見になのはちゃんと僕は押し黙った。

時間はあっという間に過ぎて、放課後……
なのはちゃんと僕はアリサちゃんとすずかちゃんと、別れて一緒に帰路についていた。

「ねえ、のび太君が首から掛けてるペンダントって……」
「なのはちゃんの察してる通り、昨日一緒に戦った僕の相棒“テネフィフス・ドラゼット”だよ！！」
僕となのはちゃんは、そんなこんなで会話をしていた時
「「！！」」
僕となのはちゃんは膨大な魔力に反応した。それが意味するのは『ジュエルシード』の発動。
僕達はお互いに頷きあうと魔力の発生源に向かった。
魔力の発生源はとある神社だった。ユーノも手前で合流した。
石段を駆け上がった先に居たのは、６つの目がある黒い野犬だった。

「ジュエルシードが原住生物を取り込んでる…」
「するとどうなるの？」
ユーノの呟きになのはは質問する。
「要するに、パワーアップしてるから気を付けろって事だよ！！」
なのはの質問に答えたのはユーノではなく、のび太だった。

黒い野犬はのび太達の存在に気づいたのか、なのは目掛けて飛び掛かって来た。
「！！テネフィフス！！」
【オーライ】

のび太は、一瞬でバリア・ジャケットを纏い、黒い野犬をテネフィフスをガンブレードモードを展開して受け止めた。
「なのはちゃん！！　今の内にレイジングハートを起動させて！！」
「ふえ！でも、どうやって？」
テネフィフスには封印術式は登録されていない。ジュエルシードを封印するにはレイジングハートが必要不可欠なのだ。

「なのはちゃん！念じて見て！！」
「うん！レイジングハート、お願い！！」
なのはの声にレイジングハートが反応し、起動する。
「起動パスワード無しに起動した！？」
ユーノが驚く。

僕は、黒い野犬にガンブレードで何回か斬りつけた後後ろに後退してガンブレードモードを双銃モードに戻して……
「プリズム・バレット！！」

黒い野犬は、僕が双銃から放った魔力弾丸で黒い野犬は怯んだ。それを確認した僕は……

「！！なのはちゃん！」

「うん！リリカル　マジカル　ジュエルシード、シリアル１０……封印！！」

《シーリング》

桜色の紐が野犬に巻き付き、ジュエルシードが封印される。
封印されたジュエルシードは前回と同じように赤いコアに吸収される。

「お疲れ様、なのはちゃん。」

「ふえ～、緊張したよ～」

「そろそろ、帰ろう？」

「うん。行くよ、ユーノ君！！」

僕となのはちゃんとユーノはその場から離れて家に帰っていた。

こうして２つ目のジュエルシードは無事に回収された。

次回に続く！！

第五章：無印編４（前書き）

すいません、更新遅れました。

後、後書きにアンケートを設置しました。

第五章：無印編４

２つ目のジュエルシード回収から数日が経過した。あれからも順調に回収し、回収したジュエルシードは四個になった。

そして、なのは達はなのはの父が経営するサッカーチームの試合観戦に来ていた！！

「のび太君！頑張って♪」

試合様子を見てみると奮闘する男子の中に我らが主人公森川のび太がグランドを華麗にドリブルやフェイントをして相手を翻弄しながら駆け回って居た。

何故、のび太が参加しているのかというと、チームに欠員が生じて、代理として運動能力を有するのび太が抜てきされたからである。

結果から言えば、のび太のハットトリックとアシストにより敵チームの惨敗だった。味方はのび太の得点とアシストのおかげでどんどん得点するのに対し、敵チームはのび太によってことごとく妨害され、得点出来ずに無情にも試合終了のアラームが鳴り響いた。

「相変わらず、のび太は運動神経抜群よね。」

「本当だよね～」

「私も、のび太君みたいに運動神経良かったらな。」

「そうかな、買いかぶり過ぎだよ。僕はあんまり運動神経良くないよ？」

あの後、僕となのはちゃんとアリサちゃんとすずかちゃんは士郎さんが営む喫茶翠屋に来ていた。

「（それに、僕は頭も運動も悪かったんだよな～）」

のび太が、そんな事を考えていると……

「それにしても改めてみるとこの子フェレットとはちょっと違わない？」

「「「！」」」

「そういえばそうかな、動物病院の医院長先生も変わった子だねって言ってたし。」

アリサの言葉に、すずかまでユーノの事を疑いだした時翠屋の中から選手達が出てくる。

「ごちそうさまでした～」

「今日はすごいいいできだったぞ、来週からまたしっかりがんばっ

て次の試合もこの調子で勝とうな！」

「はい、ありがとうございましたー」

選手達は解散していく、そのうちの１人が鞄から青い宝石を取り出しポケットに入れていれたのをなのはは見たが、なのはは気のせいかと思ったのか追いかけなかった。

「さて、私達も解散する？」

「うん、そうだね。」

「そっか、今日はみんな午後から用があるんだよね？」

「うん、私はお姉ちゃんとお出かけ。」

「パパとお買い物。」

「僕は、家に帰ってお風呂に入った後図書館に行こうかなと思っている。」

僕達は、そうなのはちゃんに言った。

「じゃあアリサちゃん・すずかちゃん・のび太君月曜日にお話聞かせてね？」

「お？みんなも解散か？」

「今日はお誘いいただきありがとうございました。」

「試合かっこよかったです。」

「ははは、みんなありがとな。それと、のび太君今日はありがとうね！後帰るなら送っていこうか？」

「いいえ、役にたってて良かったです！！後、一人で帰れます。」

「迎えが来るので。」

「同じです～」

「なのははどうする？」

「ん～おうちに帰ってのんびりする～」

「はは、そうか」

「じゃぁね～」

「それでは。」

「また明日〜」

のび太ｓｉｄｅ

なのはちゃん達と別れた僕は家に帰ってお風呂に入った後図書館に本を返して家に戻ろうした時ジュエルシードが発動したのを感じた僕はテネフィを発動させてＢＪ（バリア・ジャケット）着け急いでジュエルシードが発動した場所に向かうとそこにはなのはちゃんとユーノが先に到着していた。

のび太ｓｉｄｅｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

なのはとユーノもジュエルシードの発動に気づきマンションの屋上に上がり変身する。

「レイジングハート、お願い！」

「Ｓｅａｌｉｎｇ　Ｍｏｄｅ　Ｓｅｔ　ＵＰ」

なのはは街の状態を見て驚いていた。

「ひどい…。」

「ジュエルシードを人間が発動させちゃったんだ、強い思いを持ったものが願いを持って発動させたとき一番強い力を発揮するんだ。」

「（やっぱりあの時の子が持ってたんだ、私気づいていたはずなのにこんなことになる前に止められたかもしれないのに…）」

私が、自分のせいでこんな現状になったと思っていると…

「なのはちゃん！！」

のび太君も、駆けつけ付けてくれた。

「のび太君、どうしょう！！」

私は、余りにもの状況に取り乱していた。

「なのはちゃん、とにかく落ち着いて。」

私は、のび太君の言葉で少し落ち着いた！！

「ユーノ君、こういうときはどうしたらいいの？」

私は、ユーノ君にどうしたら良いか聞くと……

【ジュエルシードの位置が不明ですから、サーチ系を使うのがいいですよ。】

のび太君のデバイス、テネフィフスさんが私に助言してくれた。

【現状を打開したいのでしょう？】

「はい！」

なのはは杖を掲げると足元に魔法陣が展開される。

「Ａｒｅａ　Ｓｅａｒｃｈ」

「リリカル・マジカル　探して災厄の根源を！」

魔法陣から幾つもの光が木々に向けて放たれる。

そして

「見つけた！」

「本当？」

「すぐ封印するから。」

「無理だよ、ここからじゃ遠すぎる！！」

「できるよ大丈夫。そうだよねレイジングハート…。」

レイジングハートの塚がのび、先端の形状は音叉のような形状に変化した。

「Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　Ｍｏｄｅ　Ｓｅｔ　ＵＰ」

「行って！捕まえて！」

レイジングハートの周りに幾つもの輪ができジュエルシードに向けて光が放たれる。

「Ｓｅａｌｉｎｇ　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ」

「リリカル・マジカル　ジュエルシードシリアルＸ　封印！」

なのはのかけ声とともに放たれる砲撃、その砲撃はジュエルシード

を確実に捕らえた。
ジュエルシードの封印とともに街に生えていた木々が消えていく。
しかし、災厄の爪痕は酷かった。

「いろんな人に迷惑かけちゃったね…。」

「えっ？な、なに言ってるんだ、なのははちゃんとやってくれてるよ。」

「…。」

「私気づいてたんだ、あの子が持ってるのでも気のせいだって思っちゃった。」

「なのは、お願い悲しい顔をしないで元々は僕が原因で、なのははそれを手伝ってくれているだけなんだから。なのは！なのははちゃんとやってくれてる。」

ユーノ君が、私を励ますように言うけど私はどうしても自分を責めてしまう。

その時

「なのはちゃん、後悔して立ち止まるなら君はそこまでで終わるよ？決めたことを諦めるのなら、僕が変わりにジュエルシードを集めるから今まで集めたジュエルシードをレイジングハートから出して

レイジングハートをユーノ君に帰して家に帰りなよ。」

「？！」

のび太君は、冷たく私にそう言ったが本当は私がこれ以上後悔しないようにする為に言った事を私にこれ以上魔法使いになってはじめての失敗を自分のせいで誰かに迷惑がかからないよする為に私はあの後のび太君に迷惑を掛けるかも知れないけど私とこれからもユーノ君のお手伝いを一緒にすることに決めて私は自分なりの精一杯じゃなく。

本当の全力でユーノ君のお手伝いではなく自分の意思でジュエルシード集めをしようと思いました。

もう絶対こんなことにならないように。

なのはｓｉｄｅｅｎｄ

次回に続く！！

第五章：無印編４（後書き）

こんにちは、作者の空蝉です。アンケートは、ドラえもんキャラ達と秘密道具を希少スキルとして出すかです！！

ドラえもんキャラを出すとしたら

１：ジャイアン

２：出来杉

３：スネ夫

三人の内二人でこの後でるフェイトとはやての彼氏にしたいと思います！！

後、秘密道具を、希少スキルにして出すか希少スキルじゃなくて普通に出さないかのどちらかでお答え下さい。

それから、秘密道具を希少スキルとし出すに当たって秘密道具の使う道具を制限などドラえもんのポケットやスペアポケットが無いのでどのように秘密道具を出すかのアイディアも募集中です！！

期限は、今週の金曜日までです！！

第六章：無印編５（前書き）

昨日、誠に申し訳ありませんでした。

バイトが、入ってしまい今日更新しました。

後、あるドラえもんキャラを出しました。

すいません、後書きにまたアンケートを実施しました。

度々、すいません！！

第六章：無印編5

僕となのはちゃんはすずかちゃんとアリサちゃんのお誘いを受けて月村邸にやってきた。
高町家と森川家と月村家はそれなりに距離が離れており、僕となのはちゃんはバスに乗ってやってきた。
今回はユーノ君となのはちゃんのお兄さんである恭也さんも同行している。

ちなみに、僕は恭也さんとはとっても仲が良いのでバスの中で色々な話をしていた。

バスに揺られること数分後月村家の近くのバス停に着き僕達は歩いて月村家に向かった。

歩く事、5分やっと月村家に到着した。

やっぱり何回来てもすずかちゃんの家はデカいと思うんだよな～

と、僕が心の中でそう思っていると玄関からすずかちゃんとアリサちゃんとすずかちゃんのお姉さんで恭也さんの彼女の月村忍さんとメイド長さんのノエル・K・エーアリヒカイトさんが出迎えてくれた。

「お待ちしておりました、なのは様、のび太様、恭也様。」

「ああ。」

「「こんにちは、忍さん・ノエルさん！！」」

「こんにちは、なのはちゃん・のび太君。」

僕となのはちゃんは、ノエルさんに挨拶されてノエルさんと忍さんに挨拶を返すと忍さんも僕達に挨拶を返した。

「では、なのは様とのび太様はこちらへ。」

僕となのはちゃんは、ノエルさんに案内されてすずかちゃん達が居る広い中庭に向かった。

「「ごめんごめん、遅れた／ちゃった！！」」

「別に、大丈夫よ。」

「うん、先始まったばかりだから大丈夫だよなのはちゃん・のび太君！！」

僕となのはちゃんは、すずかちゃんとアリサちゃんに少し遅れた事を詫びて椅子に座った。

「相変わらず、すずかちゃんの家は猫がいっぱいだね？」

のび太に月村邸の猫達が群がっているのを見たなのはがすずかにそう言った。足に擦り寄っている猫、膝の上で寝ている猫とお茶を飲むのに動かしている腕以外に猫がくっついているのである。

「ごめんねのび太君、剥がしてもまたくっついて行っちゃうから。」

「ううん、気にしていないから大丈夫だよ。（……ドラえもん）」

僕は、すずかちゃんにそう言うと膝に座っている猫を撫でながら前世の時にいた猫型ロボットの親友の事をふっと思い浮かんだ。

「どうしたら、ここまで懐かれるのかしらね？」

「あ、あはは」

話してる間も猫達はなでて～という風に擦り寄ってきていた。

そんな猫達をのび太は撫でていたら……

「キュー！」

ユーノが子猫から逃げていた。

「ユ、ユーノ君？！」

と、その時ノエルさんの妹のファリンさんがお菓子と紅茶などを持って来た。

「お待たせしました～、紅茶とクッキーで～す。」

ユーノはファリンの足元を走る抜けた。

「あわっあわわっお～っとっとっと」

ファリンはユーノと子猫を踏まないように避けているうちにバランスを崩し倒れそうになる。

「ファリン危なーい！」

「わー！」

すずかとなのはは、動揺して叫んでいた時……

「大丈夫ですか、ファリンさん？」

何とか、のび太がいち早く後ろに倒れそうになっていたファリンの背中を支えたが御盆乗っていた紅茶とお菓子は地面に落下してしまった。

「あ、ありがとうございます。」

「気にしないで下さい、僕が助けたかっただけですから。」

僕は、ファリンさんにそう言った時

キイィィィン

「「「！」」」

［ユーノ君・のび太君！！］

［なのは・のび太君も感じた？］

［うん、僕も感じた。］

［うん、すぐ近くなの、でも…。］

［そうだ］

ユーノは突然走り出した。

「ユーノ君？ユーノ君探してくるね？」

「僕も、一緒に探すよ。」

「手伝おうか？」

すずかちゃんも、手伝うと言ってきたが……

「ううん、二人は待っててすぐに見つけて来るからさぁ？」

僕が、すずかちゃんとアリサちゃんにそう言うとなのはちゃんとユーノ君の後を追い庭に入ってすずかちゃん達にバレない距離まで来てなのはちゃんはレイジングハートを僕はテネフィフスを発動させてＢＪを付けてまたユーノ君を追い始めた。

僕となのはちゃんとユーノ君はジュエルシードが発動するのを感じた。

「ここだと人目が…結界を張ろう。」

「結界？」

「魔法効果生じている空間と通常空間の時間進行をずらすの、僕が少しは得意な魔法だよ。」

ユーノは魔法陣を展開し結界を作る。

結界が広がると木々の奥が折れていき巨大な猫が出てきた。

「……猫なの」

「……猫だね？」

「大きいね。」

「あれは…。」

「大きくなりたいって願いが正しく叶えられたんじゃないかな？」

【そのまますぎでしょう、それは！！】

と、ユーノが言った事をテネフィがツッコミいれた。

「とにかく、ジュエルシードを封印しょう！！」

「そうだね。」

僕となのはちゃんが話していると後ろから金色の魔法弾が飛んできて猫に当たった。

「にゃぉ」

ズドォォン

猫がよろけて倒れた。

「今の魔法弾は僕の世界の…。」

「一体、何処から？」

「誰なの？！」

なのは達が魔法弾が飛んできた方を見ると黒色のバリアジャケットを着た少女と深紅色のバリアジャケットと顔に仮面を付けた少年がいた。

「同系の魔導師…ロストロギアの探索者か。」

「……。」

なのはと金色の髪をした少女がお互いを見ている間にのび太は急いで猫に近づき碧色の魔法陣を展開する。

「ジュエルシード　シリアルＸＩＶ　封印」

「なのはちゃん、ジュエルシードは封印したよ。」

と、のび太はなのはにそう言った時……

「のび太君、後ろ！！」

あの、金色の髪をした少女の隣にいた仮面を付けた少年がいきなり後ろから攻撃してきた。

僕は、なのはちゃんの声で何とか後ろからの攻撃を喰らわずに済んだ。

「君達は、一体何者何だ！！」

僕は、仮面を付けた少年に何故いきなり攻撃してきたかを聞いた。

「……瞬迅槍」

が、少年は自分のデバイスを槍モードにしてまたもや僕に不意打ちで攻撃してきて何とかのび太はテネフィをガンブレードにして何とか受け止めた。

「俺様達の邪魔をするな！！」

仮面を付けた少年は、そう言うとまたのび太に攻撃を仕掛けた。

「これでもくらえ、墜牙爆炎槍！！」

「うわぁぁ！！」

のび太は、それを避けきれず攻撃を喰らってしまい地面に落下した時に気絶した。仮面を付けた少年も一緒に降りてのび太が封印したジュエルシードをのび太から奪い取った。

「のび太君！？」

なのはも、遅れて地面に降りてのび太の所に向かった。

「フェイト、ジュエルシードは回収した早く戻るぞ。」

「……うん、わかった。」

「待って！！」

なのはが、二人にそう言うが二人はその場から消えた。

それから、あの二人が消えて３０分後のび太は気絶から目を覚ました。

「ごめん、なのはちゃん・ユーノ君。」

「ううん、謝らないでのび太君」

「そうだよ、悪いのはあの二人組なんだから。」

「そうだけど、僕があの時あの仮面の子の攻撃を避けていればジュエルシードは奪われないで済んだはずなのに！！」

「のび太君、過ぎた事を後悔しても仕方ないよそれを次にどういか

すかを考えようよ。」

なのはちゃんが、僕にそう言った。

「……うん、そうだね。」

僕達は、その場を後にしてすずかちゃんとアリサちゃん達がいる場所に戻っていた。

次回に続く！！

第六章：無印編５（後書き）

アンケートは、この前もやりました秘密道具を出すか出さないかの事です！！

皆さんの意見を聞いて色々考えていた時にふっと思ったのがこの小説ののび太は設定で準チートにしているので秘密道具を出すと準チートがチートになってしまうのではと思いすいませんがまた意見をお聞かせ下さい。

本当に、すいません！！

第七章：無印編６（前書き）

希少スキルで、秘密道具としてではなく能力としてのび太が希少スキルを使っています。

後、あの仮面少年の正体が明らかになります。（まぁ、皆さん予想はしていると思いますが）

第七章：無印編6

あの、謎の少年に敗北した2日後僕はテネフィを完全に使えるようにするために景色が綺麗な海鳴市展望台公園で僕は空き缶を木の上や物影や色々な所に置き真ん中立ってテネフィだけ発動させた。

「じゃあお願いね、テネフィ。」

【分かりました、ではマスター修練開始です！！】

僕は、テネフィの開始の合図でテネフィを双銃モードにし修練を開始した。

パンパンパンパンパンパンパンパン

カンカンカンカンカンカンカンカン

【マスター、次でラストです！！】

「分かった、これで最後ウィング・バレット！！」

僕は、展望台にあるベンチの背もたれの上に置いてある最後の空き缶に新しい魔法（魔力を変換資質の疾風に変換させて）を撃ち込んだ。

パン……カンカンカラカラカラ

【良いできですね、マスター。】

「そうかな？」

【はい、それに今のマスターなら希少スキルを完全に使えると思います。】

「希少スキル？」

僕は、テネフィが言った希少スキルについてテネフィに聞いた。

【マスターには、希少スキルの空間転移と一時的に空間を完全封鎖出来るものがあるんです。】

「空間転移と言う事は相手や自分が知っている場所などに転移ができまたもう一つ希少スキルの一時的に空間を完全封鎖出来るスキルは相手を別の場所に空間転移させた後にそこから一時的に空間を完全封鎖してそこから自分が居た場所に転移が一時的にできないようにと言う事で良いんだよね？」

【はい、その通りですマスター！！】

僕は、テネフィから聞いたその希少スキルを前世で使った秘密道具

のどこでもドアと地平線テープに似ていると思った。

「ねぇ、テネフィ。」

【どうしました、マスター？】

「その希少スキルって、今から使える用にするために特訓する事出来る？」

【マスター、希少スキルの特訓は可能ですがマスターならすぐに希少スキルを完璧に使える用になると思いますよ。】

「そうか、じゃあ早速希少スキルの特訓をしたいんだけどテネフィ良いかな？」

【了解しました、マスター！！】

こうして、僕は希少スキルを使えるようにするためテネフィと希少スキルの特訓を始めた。

テネフィと希少スキルの特訓から一週間後、今僕達森川家と高町家とアリサちゃんと月村家は海鳴温泉に来ている。道中はもちろんなのはちゃんと一緒に車に乗り。なのはちゃんと僕は車内で色々な話をした。それと希少スキルに付いてだけどテネフィとの特訓のおかげで3日で完璧に使えるようになった。それからしばらくして海鳴温泉に着いた僕達は、温泉に入ることにしたのだが・・・・

「のび太くん！も一緒に入るの！」

「はい？」

僕は、なのはちゃんのその言葉に耳を疑った。

「あの、なのはちゃんもう一回言ってくれないかな？」

「だから、のび太君も一緒に入るの！」

どうやら、僕の耳は正常のようだ。

「いやあの、僕は男だからね？」

「でも１１歳までならこっちに入っても平気なの！」

「そう言う問題じゃなくて……」

僕が、なのはちゃんにそう言うと

「じゃあ良いよ、ユーノ君と入るから。」

「「はい？／きゅ！？」」

僕は女湯にユーノ君を連れて行こうとするなのはちゃんからユーノ君を掴み取った。

「いやいや、いくらペットだからってユーノ君も雄（男の子）だから僕が男湯に連れて行くよ。」

と、僕はユーノ君を連れて男湯に入った。

男湯に入った、僕とユーノ君は体を洗った後温泉に浸かっていると
ユーノ君が念話でお礼を言ってきた。

『先は、ありがとうのび太君。危うく、淫獣ユーノ何て呼ばれると
ころだったよ！』

「（当たり前だよ、ユーノ君いくらペットだからって女湯に入る何
て有り得ないよ。）」

『うん、そうだね。』

「（でも、良かったね僕が居て居なかったら今頃ユーノ君女湯に入
っていたかもよ？）」
『まさか、そんな事ないよ～』

「（でも、内心はなのはちゃんと入りたかった何て思っていないよ
ね？（黒笑））」

僕は、ユーノ君に黒い笑みを浮かべながら聞いた。

『ハッハッ、そんな事思ってないよのび太君（汗）』

ユーノは、のび太の黒笑にビクビクしながらも女湯に入る事を否定した。

こうして、ユーノの淫獣フラグはのび太によって消滅した？

30分後、僕とユーノ君は温泉から出て先に温泉から出ていたなのはちゃん達が変な女の人に絡まれていた。

「は～い、おチビちゃんたち。」

僕とユーノ君となのはちゃんは、女の人から魔力を感じていた。

「君と君かね、うちのご主人をアレしてくれたのは？」

女の人が、なのはちゃんと僕を指差しそう言った。

「「あの私／僕と貴女は初対面の筈ですよ？変な言いがかりを付けないでくれませんか？」」

僕となのはちゃんは、女の人にそう言った。

「ははは♪ごめんごめん。知り合いによく似ているもんだったからさ」

「それなら、いいですが気をつけてくださいね。」

僕は、女の人にそう言うと……

「忠告感謝しておくよ」

女の人は通り過ぎようとした時に僕となのはちゃんの耳元にそう言って

『今回は様子見だよ。いい子は大人しくしておくんだね。さもないとガブッ！！って行くよ。』

すれ違う時に、女の人は僕となのはちゃんに思念通話で脅しを掛けてその場を後にした。

その後、僕となのはちゃん達は卓球をした後部屋に戻った僕は寝ようとした時……

キイィィィン

「！！？」

ジュエルシードの発動を感じた僕はなのはちゃんとユーノ君に念話をした。

「（なのはちゃん・ユーノ君！！）」

「（うん、私も今ジュエルシードを感じたよ。）」

「（とにかく、ジュエルシードを探しに行こう。）」

ユーノ君のその言葉に、僕はテネフィを持って外に出た。

外に出た僕は、なのはちゃんとユーノ君と合流した。

「二人共、変身するんだ。」

ユーノ君に、言われて僕となのはちゃんは変身する事にした。

「「レイジング・ハート／テネフィセットアップ！」」

「「Ｓｔａｎｄ　Ｂｙ　Ｒｅａｄｙ　Ｓｅｔ　ＵＰ」」

僕となのはちゃんは、レイジング・ハートとテネフィを起動させバリア・ジャケットを着てジュエルシードが発動した場所に急いで向かったが時既に遅くあの女の人と謎の少女と仮面の少年が先にジュエルシードを封印していた。

「間に合わなかったか。」

「あらら・・・・あたし、言ったよね？良い子にしてないと・・・・ガブッ！！って行くよって！！」

女の人は、僕達にそう言って狼のような姿に変わり僕達に向かおうとした時……

「アルフ、あの眼鏡の奴は俺様の相手だから手を出すな。」

仮面を付けた謎の少年は女の人にそう言うと女の人は

「分かったよ。」

渋々、仮面を付けた少年にそう言った。

「なのはちゃん、あの仮面を付けた少年は僕を指名のようだからあの少女の相手お願いね？」

「うん、分かった。のび太君気を付けてね！！」

「うん、分かった。」

僕は、なのはちゃんにそう言って仮面を付けた少年とその場から離れた場所に向かった。

なのはちゃん達から、離れた僕は仮面を付けた少年と相対した。

「ねぇ、いい加減その仮面を外したら？」

僕は、そう仮面を付けた少年にそう言うが少年は返事を返さない

「ハァ、君がそういう態度なら此方から行かせて貰うよ！！」

僕は、テネフィをガンブレードモードにして仮面の少年に攻撃を仕掛けたが少年も自分のデバイスを大剣モードにして僕の攻撃を受け止めた。

「まぁ、そんな簡単に行くとは思っていないよっと！！」

ガキッンガキッンガキッンガキッンガキッンガキッンガキッンガキッン

僕と仮面を付けた少年はお互い攻撃を仕掛けるが中々決定的な攻撃は受ける事がなかった。

「（チッ、早くこの場を何とかしてなのはちゃんを助けないと……）」

僕が、そんな事を考えているとテネフィが僕に念話で喋ってきた

【マスター、こんな時に特訓してきた希少スキルを使う時です！！】

テネフィの、その言葉に僕は……

「（そうだね、ありがとうテネフィ君のお蔭で何とかなりそうだよ。）」

僕は、テネフィにそう言って仮面を付けた少年に向かって突撃した。

「ふぅ、何をすると思ったら突撃か？俺様にそんな物通用しないぞ！！」

仮面を付けた少年は、同じく僕に向かって突撃してきた。

「（よし、今だ！！）」

僕は、仮面を付けた少年とぶつかりそうになる前に希少スキルの空間転移で仮面を付けた少年の背後に回った。

「何！？」

仮面を付けた少年は、いきなり僕が消えて背後に回った事にびっくりしていた

「これでも喰らえ、ウィング・バレット！！」

僕は、テネフィをガンブレードモードから双銃モードにして仮面を付けた少年にウィング・バレットを喰らわした。

ウィング・バレットは、仮面を付けた少年に当たりそのせいで少年の周りは煙りが立ちこめていた。

「今のは、直撃したよね？」

僕は、そう呟き煙りが消えるのを待った。

煙りが、消え始めて僕は仮面を付けた少年がいた場所を見るとそこにはウィング・バレットが直撃したのかいたるところに傷を負いバリア・ジャケットも所々破れていたが一番僕が驚いたのは仮面が外れたその少年の顔が前世での親友の一人である剛田武通称ジャイアンその人だった。

「ジャ、ジャイアン？」

「やっぱり、お前はのび太だったか！」

「気付いていたの、僕の事？」

「……嫌、最初の時にお前が俺の攻撃で気絶した時と先此処に来る時にあの女の子がお前の事をのび太と呼んだ時に何となくお前かなと思ってはいたがまさか本当にのび太お前とはな……」

ジャイアンは、そう言った。

「どうして、ジャイアンは此処に？僕は死んだあの後転生して今の親の所に生まれたから居るけど……」

僕が、そうジャイアンに言うと

「……それは」

ジャイアンが、困ったように沈黙していると……

「（ジャイアン、此方は終わったよ。）」

謎の少女からジャイアンは念話を受けた

「（分かった、先にアルフと戻っていてくれないかフェイト？）」

「（分かった、アルフと先に戻ってるね！！）」

「（分かった。）」

謎の少女フェイトからの念話を終えジャイアンはのび太にこう言った。

「のび太、今はまだ事情は話せないけどいつか言うから待ってくれないか？」

ジャイアンが、僕にそう言うと僕は……

「分かった、君が何であの少女と居るかは今は聞かないけどちゃんと事情が終わったら理由聞かせてよ？」

「分かった、約束する。」

ジャイアンは、そう僕にそう言ってその場を後にして僕もなのはちゃん達と合流して旅館に戻る事にした。

次回に続く！！

第七章：無印編６（後書き）

次回は、いよいよＫＹクロノ君が登場します。

第八章：無印編７（前書き）

更新遅れて申し訳ない！！

今回、ＫＹがやっと登場しました。

第八章：無印編7

二回目の会合からちょっとして、なのはちゃんとアリサちゃんがケンカした。理由はなのはちゃんが余りにも今回の事を自分で何とかしょうとしている為喧嘩が起きた。原因はなのはちゃんと僕がアリサちゃんとすずかちゃん達に内緒の事や悩みがあるのにそれを相談しなかったので喧嘩してしまい、僕となのはちゃんは一緒に帰る事にした。

「……」

「なのはちゃん、いつまで悩んでいるの？なのはちゃんは昔からそうだよね、いつも自分で考えてたらとことん悩む所は……」

「……ん、ごめんなさい」

「いや、僕に謝られても困るよ。ちゃんとアリサちゃんとすずかちゃんに言わないと。まぁ僕もだけどね……」

「うん……それはわかってるんだけど……」

まぁ、言えないよね魔法のことなんて。

「うん……明日、ちゃんと謝る」

「そう、僕も一緒に謝るよ。僕も同罪だからね……」

僕は、そう言うとなのはちゃんと別れて家に戻った。

その日の夜、ジュエルシードが発動しなのはちゃんとフェイトはまた相対し互いの攻撃が響き、それによりレイジングハートとバルディッシュが壊れてしまいその場に居た僕は今回中立の立場に徹し僕はなのはちゃんとフェイトにこう言った。

「この、ジュエルシードは僕が一時的に預かる事にするよ。」

「そんな！！」

「そうだよ、のび太君どうしてそんな事を言うの！？」

僕のその宣言に、なのはちゃんとフェイトが何でと聞いて来た。

「何故って？今のお互いのデバイスでジュエルシードを封印何てしたらデバイスは壊れて今までお互いが納めて来たジュエルシードが封印が解けまた集めないといけなくなる可能性が出てくるんだよ？そんな事になれば人的被害が起きる可能性もあるんだよ。それでも二人はその傷付いたデバイスでジュエルシードを封印すると言うなら僕は君達を許さないよ！！」

僕のその言葉を聞いた、ジャイアンが……

「フェイト、アルフ、撤退するぞ！！」

「え、でもジュエルシードが……」

フェイトは、のび太が持っている封印されたジュエルシードを見て

ジャイアンにそう言うと

「のび太、そこの白い魔導師のデバイスとフェイトのデバイスが治ったらお前が持っているジュエルシードを賭けてそこの白い魔導師とフェイトと勝負させて勝った方にジュエルシードを渡す。それで良いか？」

ジャイアンが、僕にそう言ってきて僕は……

「分かった、なのはちゃんもそこの黒マントの少女もジャイアンの提案で良いね？」

僕は、そう二人にそう言うと二人は

「分かった、ジャイアンの提案に乗る。」

「私も、それで良い！！」

二人は、僕にそう言った。

「なら、その勝負は次ジュエルシードが発動してジャイアンが封印した時今僕が持っているジュエルシードとジャイアンが封印したジュエルシード２つを勝負で勝ったどちらかに渡すし恨みっこなしだからね。」

僕が、そう言うとなのはちゃんと黒マントの少女も了承しお互いこの場を後にした。

まさか、今回のなのはちゃんと黒マントの少女の戦いによって時空管理局と言う変な組織が来るとはこの時僕達は思いもしなかった。

あの、なのはちゃんと黒マントの相対から3日相変わらずなのはち

ゃんは今だにアリサちゃん達に謝っていないし僕ともあの一件で少し離れていた。

学校から、帰る時公園に差し掛かると、アリサちゃんがいた。

「アリサちゃん。」

「あ、……のび太」

「この前は、ごめんね！！」

僕は、アリサちゃんに謝った。

「別に、良いわよ。人間誰しも秘密はあるんだから……でも。」

「（はぁ、なのはちゃんまだアリサちゃんに謝っていなかったんだ。）」

僕が、心の中でそう思っていたら……

「アリサちゃんお待たせ……って、のび太君？」

「やぁすずかちゃん。すずかちゃんもいたんだね」

「うん、この前のことでちょっとね。」

すずかちゃんは、僕にそう言った。

「でも、久しぶりだね、喧嘩したの？」

「うん、そうだね。」

「まぁ、あの時は私達最悪な出会いかっただったわね？」

「うん、あの時はアリサちゃんがすずかちゃんのリボンを取ってそれを見たなのはちゃんがアリサちゃんにリボンをすずかちゃんに返してあげてって言ったのに。」

「私が、断ったからなのはと喧嘩して」

「のび太君が、二人を止めたんだよね。」

「我ながら、昔の私は我侭で強がってたからね」

「うん、昔はアリサちゃんもすごかったから」

「そうだね。」

僕達は、そんなたわもない話をして僕達はそろそろ帰る事にした。

「アリサちゃん・すずかちゃん、もう少しなのはちゃんの事待って

あげてくれないかな？」

「それは、構わないけど。」

「私も」

「そう、ありがとう二人共。後少ししたらなのはちゃんがちゃんと二人に謝ると思うから。」

「「分かった」」

アリサちゃんとすずかちゃんは、僕にそう言い僕達はその場を後にし帰る事にした。

その日の夜、海鳴臨海公園にてジュエルシード発動し僕は、ジュエルシードが発動した時テネフィを発動し希少スキルの空間転移を使って先に海鳴臨海公園に向かった。

「ふぅ、まだなのはちゃん達は来てないみたいだね。」

僕が、そう呟いた時なのはちゃん達も海鳴臨海公園に到着した。

「のび太君。」

「やぁ、なのはちゃん」

「やぁ、じゃないの！！のび太君と一緒に来たかったのに。」

「まぁ、それは良いからあれ何とかしょう？」

「……分かったよ。」

なのはちゃんは、渋々僕の言う事を聞いてなのはちゃんは黒マントの少女と一緒に砲撃をする準備をする。

「今だ！」

「うん」

「は、はい！！」

僕の合図で、二人は木の化け物に砲撃を放った。

「ディバイン！バスター」

「貫け、轟雷！サンダースマッシャー」

二つの砲撃が命中。すぐさまジャイアンがそれを封印する。

「これで、大丈夫だろう」

「あ、ありがとう……」

「ふっ、君からそんな言葉を聞けるとはね？」

僕がそう言うと、黒マントの少女はちょっと顔を紅くするがすぐにデバイスを構えた。

「それじゃあ、前回のジュエルシードと今回のジュエルシードを賭けて勝負をしますか。」

僕は、なのはちゃんと黒マントの少女にそう言った。

二人は、空に浮かび上がって相対した。

「これだけは、譲れないから」

「私はただお話したいだけなんだけど・・・・」

二人は、そう言い駆け出す。その瞬間、水色の魔法陣が張られた。

「ストップだ！ここでの戦闘は危険すぎる！時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい話を聞かせてもらおうか？」

何か、変な奴が来たなと思った僕とジャイアンだった。

次回に続く！！

第八章：無印編７（後書き）

次回は、ＫＹをフルボコにします。

第九章：無印編8改（前書き）

更新遅れて申し訳ありません！！

後、誤字修正しました。

それと、後書きにまたアンケートです。

第九章：無印編8改

のび太ｓｉｄｅ

僕とジャイアンは、なのはちゃんとフェイトちゃん（ジャイアンから名前を聞いた。）二人の戦いを遠くから始まるのを待っていていざ始まって二人がお互いのデバイスを振りかざした時水色の魔法陣が張られ……

「ストップだ！ここでの戦闘は危険すぎる！時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい話を聞かせてもらおうか？」

何か、変な奴が来たなと思った僕はジャイアンに念話で話をした。

「（ジャイアン、フェイトちゃんを連れて此処から撤退した方が良い！！）」

「（だけど、どうやって！！）」

ジャイアンが、僕にそう言うと

「（僕に、任せて。）」

僕は、ジャイアンにそう言うとテネフィをガンブレードモードにしあのＳＫＹ（スーパー空気読めない奴）に向かって突撃した。

のび太ｓｉｄｅ終了

三人称ｓｉｄｅ

ガキーン

「のび太君！？」

なのはは、遠くから自分とフェイトの戦いを邪魔をしたクロノ？にテネフィをガンブレードモードにしたのび太が攻撃して来た事に驚いた。

「君、いきなり何をするんだ？」

「何をするんだって？それはこっちの台詞だよ！！いきなりなのはちゃんとフェイトちゃんの戦いを邪魔をして」

「だから、僕はここでの戦闘は危険すぎる！時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい話を聞かせてもらおうか？って言ったじゃないか！！」

「ハァ、君馬鹿？こっちは地球で時空管理局何て知らないんだよ。」

「嘘を付くな、じゃあ君は何故魔法を使っているんだ？」

「魔法ね～、これはなのはちゃんも同じだけどここ最近魔法の事をしたばかり何だけどってどうせ信じないだろ？」

「だから、嘘を付くな！！あぁもう良い君達を逮捕する。」

それを聞いた、ジャイアンは……

「フェイト・アルフ、撤退するぞ！！」

「うぅん、分かった。」

ジャイアン達が、撤退しょうとすると

「逃がすか！！」

クロノ（ＳＫＹ）が、ジャイアン達に攻撃しょうとした時

「ファントム・バレット！！」

「うわぁ！！」

のび太は、テネフィをガンブレードから双銃モードにし魔法弾がクロノに直撃し地面に落下しそれを見たのび太はジャイアン達にこう言った。

「ほら、ジャイアン早く撤退しなよ～」

「あぁ、ありがとうなのび太。（のび太お前、いつからそんな腹黒い事ができるようになったんだよ！！）」

ジャイアンは、のび太に助けて貰いお礼を言いながら心の中では親友の腹黒さにちょっと引いてしまった。

ジャイアン達が、その場を離れて行くの見ながらのび太は手を降って見送った。

「「（のび太君怖い／なの！！）」」

なのはとユーノも、この時ジャイアンと同じ事を思いお互い心の中でシンクロした。

フェイト達が撤退し。地面に落下したクロノが怒りの表情でのび太の前に現れた。

「貴様っ！」

「何を、怒っているわけ？」

のび太が、クロノにそう言うと

「貴様が行ったのは公務執行妨害だ！」

「で？」

「貴様っ！」

のび太が、だから何みたいな事をクロノに向かって言うとクロノはのび太の態度にキレのび太に向かって自分のデバイスであるスティンガーで攻撃して来た。

「これ以上話しても無意味だ！君を逮捕する！」

「僕を、逮捕するだって君じゃ無理だよ！！」

のび太は、クロノの後ろに空間転移した。

「何！？」

クロノは、いきなりのび太が前から消えて自分の後ろに現れた事に

驚いた。

「さて、僕と一緒に別の場所で戦って貰うよ。」

のび太は、クロノにそう言うとクロノを掴んでその場から転移した。

海鳴市廃工場跡地

のび太は、クロノと一緒に海鳴市廃工場跡地に転移し工場跡地に結界と自身の希少スキルである一時的な空間を完全封鎖した。

「くぅっ、貴様こんな所に僕を連れて来てどうする気だ！！」

クロノは、のび太にそう言ってきた。

「そんなの決まってるじゃん、今から君をなのはちゃんとフェイトちゃんの勝負を邪魔をしたからフルボッコにするんだよ！！」

のび太は、クロノにそう言うとテネフィをガンブレードモードにしてクロノに向かって攻撃を仕掛けた。

「くっ！」

「ほらほら、どうしたの？」

クロノは、のび太の攻撃を自らのデバイスであるスティンガーで受け止めたりいなしているがＢＪ（バリア・ジャケット）や腕などを所々切り傷や破けていたりしている。

「ハァハァハァハァっ」

「そろそろ、終わりにするよ？なのはちゃんとユーノ君を待ったせているからね。」

のび太は、クロノにそう言うとテネフィを双銃モードにしクロノに狙いを定め……そして

「ウィング・バレット！！」

「うわぁぁぁ！！」

クロノは、のび太が撃ったウィング・バレットを喰らって地面に落下した。

のび太は、地面に落下したクロノの方に行き……

「バインド！」

クロノの体にバインドを掛けて廃工場に合った縄でぐるぐる巻きにしてのび太は、なのは達の所戻っていた。

海鳴臨海公園

なのはとユーノは、のび太があの時空管理局の人を連れて消えた為お互いどうしょうどうしょうとしていると……

「やぁ、なのはちゃん・ユーノ君。」

「「のび太君！！」」

なのはとユーノは、いきなり現れたのび太にびっくりしたが最びっくりしてしまった。

「の、のび太君この人どうしたの？」

「うん？あぁ、ほらなのはちゃんとフェイトちゃんの勝負を邪魔したからちょっとフルボッコにしたんだよ。」

「あ、あの・・・なにもそこまで・・・・」

「なのはちゃんは、優しいね？フェイトちゃんとの勝負を邪魔されたのにこのＳＫＹ（スーパー空気読めない奴）を心配するんだ。」

「それでも、これはいけないと思うの。」

「まぁ、こいつは此処にそのまま放置してそろそろ帰ろ？」

「え、でも……」

のび太となのはが、そんなやり取りをしているとき

『待ってくれないかしら？』

いきなり、のび太となのはを呼ぶ声が聞こえた。

「誰ですか？」

『そこにいるクロノ・ハラオウンの上司であり、母親のリンディ・ハラオウンと言う者です。武器を収めてもらえないかしら？それと

私の話を聞いて欲しいのだけど』

「ハァ？いきなり現れて真剣勝負をしょうとしている所に訳の分からないこのＳＫＹ（スーパー空気読めない奴）が現れて勝負をぶち壊した奴の母親だからって何故いきなり武器を収めて下さいって言われても信用出来るわけないだろ？」

のび太が、リンディにそう言うと

『私たちに敵意はありません』

リンディは、そうはっきりとそう言った。

「ねぇ、のび太君。」

「何、なのはちゃん。」

「私は、リンディさんって言う人の話を聞いても良いよ。」

それを聞いた、のび太は……

「ハァ、待ったくなのはちゃんは優しいね……分かったよあんたの話を聞いてあげるよ。」

のび太は、なのはちゃんと一緒に渋々時空管理局の戦艦がある場所

に向かう事にした。

おまけ

クロノは、のび太によって引きずられながら時空管理局の戦艦に着いた。

次回に続く！！

第九章：無印編8改（後書き）

今回のアンケートは、プレシアとアリシアの二人を助けるか助けないかです。

助けるなら、1でお願いします。

助けないなら、2でお願いします。

期間は、次回の更新の時に発表します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3287w/

リリドラクロスオーバー～優しき少年の恋物語～

2011年11月15日23時16分発行